

# 目的と実践の符合を ～ホームページ作成を例に～

ウェブデザイナー 角南 北斗

shokuto@d1.dion.ne.jp

## 0. はじめに

私の肩書きは「ウェブデザイナー」です。平たく言うと「ホームページを作る人」です。本稿では、私がプロとして制作する対象であり、教育現場でも行われている「ホームページ作成」というテーマで、情報教育について考えてみます。情報教育の現場で毎日を過ごしている人間ではないぶん、多少の事実誤認もあるかもしれません。議論を深めるためのひとつの問題提起として受け取っていただければ、と思っています。なお私自身についての詳細は、本稿の最後の欄をご覧ください。

## 1. 目的と実践はなぜ乖離するか

本題に入る前に、一般的な話から。情報教育の議論にふれるたびに感じるのが、「実践の前提としての教育理念や教育目的に対して、意識が十分に向けられていないのではないか」ということです。

私は、現場での個々の実践は教育目的によって規定され、個々の教育目的は教育理念という大きな枠でくられる、と考えています。目的に合った実践、理念に沿った目的設定ということですが、ことに情報教育の議論では、この前提が前提として機能していない印象を受けるのです。「なぜ授業でそれをするの

か？」という問いに対して、十分に整理された答えが返ってこない場合が少なくありません。

情報教育は何を目指し何を学ぶものとするのかについては、個々人で意見は様々でしょう。私は「コンピューターが生活に深く関わるこれからの社会で、自分で主体的に判断して情報を扱っていけるスキル」こそが、皆が等しく情報教育で学ぶべきことだと考えています。特定のプログラムの知識や、特定のソフトの操作技術はさして重要ではありません。職業訓練となると話は別ですが、一般の基礎教育としては汎用性の高いものだけを学べば良いと考えています。本稿ではこの教育観を前提として話を進めます。

目的と実践にギャップが生じ、連携や意見交換の場で教育理念の共有が図れていない。そんな状況があるとすれば、それは情報機器というものを教育者が十分に捉えきれていないことが一因なのではないでしょうか。他の教科ならばスムーズに考えを煮詰められるのに、相手が新参者の「情報」となるとどう扱ってよいのか困ってしまう、と。

また、情報機器によって急速にその形を変えつつある社会の影響を受けているのは、なにも生徒たちだけではないでしょう。教育者の多くもまた、そんな社会に等身大で向き合

えず苦労しているはずですが。それなのに現場の課題は日々解決していかなくてはなりませんから、小手先の対処策に議論が陥りがちなのではないのでしょうか。ここはひとつ、回り道に見えても教育の指針レベルから考える必要があるように思います。

## 2. ホームページの何を学ぶべきか

私はプロとしてホームページ<sup>1)</sup>制作を行っています。小中高の現場でも授業でホームページを作っていると聞きます。素朴な疑問としてあるのが「なぜ学校の授業でホームページを作るの？」ということです。イチからきちんと作るのは決して簡単なものではないでしょう。思うように形作るのにはスキルがいますし、そもそも様々な知識がなければどんな完成型をイメージすれば良いのかもわからないのではないのでしょうか。それでも活動として取り上げられるのは、そうしたスキルや知識を学ぶこと自体に意味を見いだしているか、ホームページを作る過程で学べるものが大きいのか、そのどちらかの理由でしょう。

ホームページを作るスキルとして一般によく挙げられるのが、HTML や JavaScript のようなプログラマ的なお作法と、ソフトの持つ機能を利用するための操作技術です。これらは確かにホームページを作るのに必要な要素ですが、万人にとって「しっかり覚えることに意味がある」類いのスキルではありません。HTML はリファレンスがあるのでいつでも参照できます。ソフトは進化変遷していきますから、メニューの位置など丸覚えしても役に

立たないでしょう。授業の目的にもよりますが、本稿では、こうしたことには必要以上に時間をかけるべきではないと考えます。

では、他にどんなスキルや知識があるのでしょうか。ひとつは、ホームページとは何かという知識です。インターネットとは何か、ハイパーリンクによる情報共有とは何かといった仕組みに関する知識。加えて、ホームページが実現している種々のサービス、ホームページを起点とした社会、文化、それに付随する出来事や事件といった現状の知識です。そういったことを知ってはじめて、ホームページというものをきちんと理解できるのではないのでしょうか。

もうひとつは、ホームページというメディアの特性です。例えば、生徒の研究発表を壁新聞の代わりにホームページで行う場合を想定しましょう。大きな一枚の紙とホームページとの違いは何でしょうか。まず一覽性に差があります。ホームページは一度に画面のサイズしか見ることができませんが、その代わりにページを相互にリンクさせる立体的な構造があります。動きや音を表現として加えられるのもホームページの特性ですね。閲覧者の操作に反応したり、閲覧者がコメントを書き込めたりといったインタラクティブな要素もあります。もちろん、時間と距離を超えられる、媒体によって情報の形を変えられるといったこともそうです。生徒にそれらを理解してもらい、ホームページをどう使えば効果的なのかを考えてもらう過程は、他の様々なことにも応用の利く学びでしょう。

そんなことを気にしなくてもホームページ

は作れる、という意見もあるかと思えます。フリー素材集から適当に画像を持ってきて、自己紹介程度のテキストを書いて、ホームページビルダー<sup>2)</sup> でちゃちゃっと並べて完成、というものです。そうやって作られたものは、生徒の作品というにはお粗末でオリジナリティがなく、かといってその制作過程に何か特筆すべき学びがあるわけでもない、単に作っただけのホームページです。そんな誰にとっても価値の薄いものを作る活動は、貴重な授業の時間を割くべきことではないと私は考えます。

### 3. 意味のあるものを作るために

ホームページをきちんと作りつつ、それを何かの表現の場などとしても生かすなら、それは情報の授業の集大成として捉えるべき活動でしょう。座学で学んだネットワークに対する知識、美術の時間に作ったボタンやアイコンなどのデジタル素材、社会の時間に調べ分析したデータ、国語の時間にまとめたテキスト。そういったものを組み合わせ、制作にしっかり時間をかけてこそ意味のあるホームページができるというものです。ホームページ制作には様々な科目との連携も必要なのです。さしたる目的もなく情報の時間だけでパッと作ったホームページは、学習者にとって意味のあるものになりにくいように思います。

以上見てきたように、ホームページを作るという行為は、基本的に時間のかかるものです。意味のある活動にするには、いくらかの知識と技術も必要とします。しかし、授業の

目的に合致したシンプルなやり方を選べば、限られた時間でホームページ作成を授業に生かすことは十分に可能です。

例えば HTML を学ぶのが目的なら、エディタとブラウザのみで十分です。出来上がるホームページは簡素な見映えですが、装飾的な要素を同時に求めてはいけません。HTML にそのような役割は本来なく、授業の目的がぶれてしまいます。また作品の共有が目的なら、画像や PDF にしてイントラネット上に置けば事足りるでしょう。ちょっとしたインデックスページを作っておけば、目的は達成されるはずです。

昨年から世間で流行しているブログ (blog)。テキストや写真をホームページに公開する手段として、ブログは有力な選択肢になるでしょう。技術的なハードルは低く、コメントやトラックバックなどをコミュニケーション目的に利用することができます。また、よりグラフィカルで動きのある見映えを求める場合は、「ID for WEB LiFE」<sup>3)</sup> という一風変わったソフトもあります。コンテンツ作りとその表現に集中するという目的ならば、良い選択肢となるでしょう。

### 4. 変わりゆくホームページ

「ホームページを作る」というのは、何もイチからすべてを作ることを指すわけではありません。最近は多種多様なインターネットサービスや、ホームページに対する従来のアプローチとは異なるソフト<sup>4)</sup> が多く出てきています。それらを上手に利用すれば、技術

的なハードルを回避して、目的に合った授業をスムーズに進めることが可能でしょう。ホームページの形態も多様化し、それが提供する体験も非常に豊かになってきています。個人の持つホームページも、イチから作るのではなく特定のサービスのカスタマイズで、という形が増えてきています。ホームページとはこういうもの、という旧来の固定されたイメージがあるのなら、それは潔く捨てるべきかもしれません。

しかし、便利なサービスやソフトがあるからといって、ホームページの本質やインターネットの世界について無知なままで良いかという、そうではないでしょう。誰もが簡単にサービスを利用し、誰もが情報の受信と発信を担える時代は、今まではあり得なかった社会問題を連れてきました。自分の身を自分で守るスキルは、必ず学んでもらうべき項目ではないかと思います。

ただ授業でさわりを紹介し、無防備なまま世界に足を踏み入れた生徒が火傷をするようなことがあってはなりません<sup>5)</sup>。教育の目的と実践が乖離した「ホームページ作成」は、時間の無駄であるばかりか、生徒に悪影響を与えるきっかけにもなりかねないということです。ただ「作る」だけではなく、本質を「理解する」こと。教育現場での適切な判断が問われているのではないのでしょうか。

刻々と変化するネット社会の状況に合わせて、ホームページというものの認識も常に変えていく必要があります。そのためには、教育関係者自身がまずやってみる。無関係を装わず、かといって過度に臆することなく、

等身大の自分で経験することが重要なのではないのでしょうか。そうして教えるべきことを自分なりに捉えられてはじめて、教育のあるべき姿が見えてくるように思います。私自身も、自分の立場を生かしてそのサポートに回りたい、そう思いながら日々活動しています。

本文注：

- 1) 専門家の間では「ウェブサイト」という呼称を使いますが、本稿では一般の方により馴染みのある「ホームページ」という呼称を使います。
- 2) きちんと意識して使えば、ホームページビルダーもプロレベルの業務に耐えうるソフトです。重要なのは、その機能をどう使うかということです。
- 3) 「ID for WebLiFE」についての詳細は、<http://www.digitalstage.net/jp/product/id/> を参照。
- 4) 写真のストックからフォトアルバムのサイトを作るとか、プレゼンツールから SWF 形式でスライドを書き出すとか、コンテンツ作りに焦点が当てられたものが増えていきます。
- 5) 掲示板やチャットなどは「作る」ものではないかもしれませんが、利用する際に気をつけるべきことがあるはずです。

#### **Text：角南 北斗 (すなみ ほくと)**

大阪府在住のウェブデザイナー。日本語教育学の修士号を持ち、日本語教師やコンピューター講師の経歴もある。「人とコンピューターをつなぐ」をモットーに、企業のサイト制作から教育現場でのコンピューターサポートまで精力的に活動中。この夏、情報教育の関連サイトを開設予定。